**週刊やすいゆたか52号12年10月４日**

**ビジネスマンの西田哲学入門１**

**はじめにー何故西田哲学入門なのかー**

　「ビジネスマン」といえば直訳すれば「仕事人」ということですが、「ビジー」が「忙しい」という意味ですから、「忙しい人」砕けて言えば「いそがしおじさん」ですね。実際、何らかの仕事に打ち込んでいれば、いくらでも時間がかかるものでして、だれでも「いそがしおじさん」になってしまいます。

　「労働者」や「勤め人」、「勤労者」とも言いますが、英語では「レイバー」「ワーカー」「サラリーマン」ですか、そういう表現だと雇われているという意味が表に出てしまって、賃金のために働くという動機に規定されている感じがします。

　しかし労働者というのは階級概念ですから、労働者としての地位を守り、権利を向上させるという階級的立場の自覚を伴ってよく使用されます。そしてそこまでいくと富を作り出しているのは労働者の労働であるということになり、労働を誇りにして主体的に労働を生きがいに生きるという労働者の模範的な形があります。そこから労働者の哲学というのも出てくるわけです。

　私は敢えて「ビジネスマンのための哲学」を語ろうというのは、労働者と対立する経営者の哲学を語ろうというのではなくて、仕事にアイデンティティを感じて生きている人ならみんなビジネスマンですから、そういう階級概念を超えて、ビジネスに生きている人の哲学という事です。ですから、労働者の立場に還った時は労働者としての自覚に生きればいいわけで、ビジネスマンとして企業をどのように運営し、企業において知識創造していくかに取り組んでいる人々のための哲学ということです。

　ビジネスと言えば民間企業だけではなく、国家や自治体のビジネスもありますし、学校運営もビジネスと言えるかもしれません。もちろん広い意味ではそうですが、さしあたっては民間企業のビジネスを対象に考えましょう。

ではビジネスマンの哲学といえば、どのように仕事を効率的にこなして利益をあげるかということなので、西田哲学ではなく、プラグマティズムの哲学が最適ではないかと思われるかもしれません。しかしそれは言われなくても、そうしていることでして、最小のコストや労力で、最大の利益を上げるようにするのは、当然のことです。プラグマティズムを不倶戴天の敵のように思っている実存主義者やマルクス主義者も、ことビジネスにおいては模範的なプラグマティストたらんと努力するのです。

　ビジネスマンのためのプラグマティズムの哲学入門は、またの機会にして、ここではあえて西田哲学を紹介しようということです。それは西田哲学が東洋思想の伝統を継承して「主客合一」「心身一如」「自他統一」として「知」を捉えているとして、野中郁次郎らの知識創造理論から見直されているからです。たしかに純粋経験、場所の論理および絶対無の自覚、行為的直観、絶対矛盾的自己同一、ポイエシスとプラクシスの統合などは、ビジネスに取り組む人々にとって是非とも理解して実践しなければならないことなのです。

　そして西田哲学は、ある意味最も新しい哲学の要素を持っています。それは「物になって見、物になって行う」という発想です。現代ヒューマニズムは、人間が作り上げた物質文明によって深刻な自己疎外に陥ったことに抗議し、物の支配からの解放を叫んでいました。その際人間と物を対極的にのみ捉え、物でない人間が物になることを主体性の喪失として人間の死として恐怖したのです。

しかし人間は物に自己を表現し、自己を実現する存在ですから、物の疎外からの解放も、物から離れることによってではなく、逆に物に成りきるという事がなければ実現できないのです。西田はそれを絶対無の自覚によって成し遂げようとしたわけです。その意味で西田哲学は現代ヒューマニズムを超克するネオヒューマニズムの要素を持っていると言えます。

**続やすいゆたかの学問遍歴**

[**『西田哲学入門講座』**](http://www42.tok2.com/home/yasuiyutaka/shoin/nishidanyuumon.pdf)

イエスを<食べるだけではなく、食べられてこそ大いなる命の循環に返り、永遠の命にいたる>とした「命のパン」の思想家として捉え返したものの、<聖餐による復活>仮説は、あまりの仰天仮説でかえって無視されたのである。こういうことになると次の出版はむつかしい。
　しかしその間、やすいゆたかは[**『西田哲学入門講座』**](http://www42.tok2.com/home/yasuiyutaka/shoin/nishidanyuumon.pdf)を一九九八～二〇〇〇年にかけて『月刊状況と主体』に連載した。梯経済哲学が西田哲学に基づいていることもあり、西田哲学への挑戦は避けることはできなかった。それに自分の著作 を分かるやすくするためにも、難解な西田哲学を分かりやすく解説することは大いに役立つはずである。高校生にも分かる西田哲学入門をうたい文句に書いたものだ。途中少々難解な部分はあるが、これだけ分かりやすいのは類書ではないだろう。
　そこで西田哲学が全体として人間学であることを実感する。「純粋経験」といい、「場所」といい、「行為的直観」といい、それは人間の実践的なありようであり、人生そのものなのである。
　西田自身の苦悩に満ちた人生の悪戦苦闘の「ドッキュメント」なのだ。西田哲学が難解なのもその苦悩がそうしからしめていたのである。それを通り一遍に易しく解説することなどできない相談ではある。ただ西田は**「物となって考え、物となって行う**」という論理があり、人間と物との絶対的な断絶を乗り越えようとするところがある。
　この試みは社会的な事物や人間環境も含めて人間を捉え返そうとするやすい自身の人間論と通ずるところがあり、やすい人間学からみた西田哲学は、それなりに分かりやすくなっていると評判である。
　　　**『評伝　梅原猛―哀しみのパトス』**

やすいは、梅原猛には立命館大学で直接授業をうけたわけではない。学部は日本史学専攻で、大学院浪人の時に梅原は立命館大学を学園紛争で辞職していた。『隠された十字架』や『水底の歌』などの怨霊によって歴史が動かされたというような非合理主義的な解釈は、科学的歴 史学を学んできたやすいにとっては到底共鳴できないだろうと敬遠していた。
　ところが初めての単著『美と宗教の発見』を一九八〇年代になって読み、権威に挑戦する梅原の迫力に圧倒される。そこで天皇制の精神的な内圧によって宗教的痴呆に陥って、日本の伝統を忘却しているという議論に共鳴した。怨霊信仰の視点から歴史を見直すということは、心を持って生きている人間の歴史として歴史を生き返らせる試みなのだ。その観点から読めば『隠された十字架』や 『水底の歌』は、すばらしい名著である。
　ではなぜ梅原だけが、聖徳太子や柿本人麿が怨霊だと気づいたのか、その謎を解く鍵は『湖の伝説』という画家三橋節子の伝記にあっ た。彼女が癌で右手を切断して、左手で絵を描いた。幼子を遺して死ななければならない思いを絵に託したのである。この伝記を書く時に梅原は彼を生後一年余りでこの世に遺して死ななければならなかった生母千代への哀悼をこめて書いただろうと思っていたが、実は違っていた。生母のことは意識下に抑圧されていたのだ。つまり命がけの恋を認めてもらえず引き裂かれようとしたため結核に罹り、医者に生めば命が危ないと言われていて、あえて猛を生んだ母の怨念が彼の潜在意識を形成して、彼を無意識に衝き動かしていた。それが彼の独特の怨霊アンテナをつくっていたのだ。
　だから『湖の伝説』後生母への思いは氾濫のごとくあふれ出し、母なる東北の蝦夷文化へ、さらにはアイヌ文化へと赴かせ、ついにイ オマンテの中に、あの世とこの世の往還の思想を見つけ出す。それは二十歳の若さで猛を置いて死ななければならなかった生母を取り戻したいという思いの現われだったのである。このことに感動して、やすいは**『評伝　梅原猛―哀しみのパトス』**をミネルヴァ書房から二〇〇五年に出版した。

**『梅原猛　聖徳太子の夢―スーパー歌舞伎・狂言の世界』**

　前著では紙幅の関係で梅原猛の戯曲などの文芸作品にふれることはできなかった。その際に梅原文学についての論稿だけで一冊分あったので、すぐにも続編の形で出版するつもりだった。しかし独立した書物となると新たなテーマで書き直さなければならない。
　「天翔ける心、それが私だ」というのがイメージにあるのだが、それは哀しみのパトスを昇華した創造の、表現の喜びの舞のようにも思えた。今度こそ『夢の翼』という表題でいきたいと思った。ところが、梅原戯曲を読み返してみると聖徳太子の和の精神が貫かれているのである。梅原は、聖徳太子から『ヤマトタケル』『オオクニヌシ』『ギルガメシュ』 を創造しているのだ。それはまさしく白鳥の天翔ける姿なのである。戦士ヤマトタケルは、大白鳥に変身した。梅原猛は、戦後精神を高らかに戯曲化したことになるのである。
　 今まで戦後の「平和と民主主義」は欧米のプラグマティズムやマルクス主義を媒介して輸入されてきたために、きわめてご都合主義的に解釈された薄っぺらいものでしかなく、日本人の心に血肉化できていなかったのではないか？形骸化が叫ばれ、弾劾された、戦没学生の「わだつみ像」まで破壊されてしまった。それは 実に嘆かわしいことである。梅原は『隠された十字架』で聖徳太子の怨霊と向き合い、『聖徳太子四部作』を仕上げることで、聖徳太子の和の精神、互いに慈悲 の心で話し合ってまとまっていくことを説いた『十七条憲法』にこそ「平和と民主主義」を受容する豊かな土壌があると覚ったのである。しかも仏教的な和の精 神は動物や植物や山河を含む国土や地球全体に及ぶものである。だから梅原猛の夢は聖徳太子の夢に他ならないのである。そういうように梅原猛こそ、日本の 「平和と民主主義」の戦後精神を土着の伝統思想から受容し、血肉化させようとしている戦後精神の真の代表者なのである。そういう観点からスーパー歌舞伎お よびスーパー狂言の世界を分かりやすく読み解いた作品である。ミネルヴァ書房から二〇〇九年２月末に刊行された。

**古典講読講座『古事記』その３**

**次高御産巣日神。 次神産巣日神。 此三柱神者、並獨神成坐而、隱身也。**

**つぎにたかみむすびのかみ、つぎにかみむすびのかみ。このみはしらのかみは、みなひとりかみになりまして、みをかくしき。**　次は高御産巣日神（高大な結びの神）、次は神産巣日神（神聖な結びの神）これで天御中主神も含めて三つの結び神がいることになります。これを神道では「造化三神」と呼んでいます。天御中主も結びの神だという理由は、中心が定まっていなければ秩序が成り立たないので、カオスに戻って何も生みだせなくなってしまうからでしょう。

　高御産巣日神と神産巣日神を夫婦神と解釈する人もいるようですが、記紀の中にはそのような記述はありません。むしろ高御産巣日神はイワレヒコ(神武天皇というのは奈良時代に後から作られた諡(おくりな)です)の東征に積極的に力を貸すので、天孫族の伝承した結びの神で、神産巣日神は出雲族の伝承した結びの神だと考えられます。

　これらの産みの神は自然自体の産む働きを神として捉えたものです。万物がそれぞれの働きによって、さまざまな物を産みだしているのが、三結びの神の働きなのですが、万物の働きがそのまま三結びの神の働きなので、物の産む働きの影に隠れてしまうのです。独り神だから対象化できないので、身を隠していると表現されています。陰陽などの対立などから生まれるのなら、見えてくるのでしょうが、そういう対照すべきものがないので、隠れているのでしょうが、結びの神の働きがなければ何も生まれないわけで、その意味では自然自体の湧き上がる力、エネルギーを指しているのでしょう。

　結ぶということは実を結ぶなど大地の産みだす働きと考えますと、高御産巣日神も神産巣日神も大地の産む働きに由来していると考えられます。ということはどの地方も土地の神を信仰していて、高御産巣日神も神産巣日神も元々は土地の神のことだったと考えられます。

各地の土地の神を「産土(うぶすな)の神」と呼びます。この信仰は欠かせないので、各地のそれぞれの神が産土の神を兼ねることになっています。ですから、天神信仰の神社でも稲荷信仰の神社でも八幡信仰の神社でもそれぞれの土地では「産土の神」でもあるのです。
　なお天御中主信仰は、隠れたとはいえ、仏教と習合して妙見菩薩信仰として各地の妙見山信仰に継承されています。それに北極星は中国では天帝の化身であることに注目しますと、天帝は道教では天皇大帝(てんこうだいてい)と呼ばれていますので、天皇信仰に姿を変えたとも考えられます。

海洋民族であった天孫族は天御中主信仰が中心だったのが、河内・大和中心の畿内王朝では農業が主産業なので、太陽神信仰に転換し、太陽神を祖先神にしたわけですが、それでは天御中主の祟りが恐ろしいので、皇帝の国内での称号として天御中主の言い換えとして天皇を採用したのではないでしょうか。その時期としてはニギハヤヒという太陽神をしていた物部氏が衰退した蘇我・物部戦争の後が考えられます。

ところで「天皇」は中国では「天帝」にあたるわけで、道教の最高神です。皇帝は天子つまり天帝の子と呼ばれ、天帝の命によって皇帝になるのですから、天皇は皇帝より格が上なのです。天下に皇帝は唯ひとりという中国の立場からは、皇帝より上の天皇の存在は容認できるはずがありませんね。
　それで天皇の称号はあくまでも国内向けでして、対外的には皇帝を名乗っていました。日本は唐の冊封体制に入らなかったので、対等な皇帝を名乗っていたのです。冊封に入ると国王を名乗ることになります。